
2027

ニマルニナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2027

【Zコード】

N6451C

【作者名】

二マル 二ナナ

【あらすじ】

パチスロ2027のプロローグがあつたらこんな感じかな？

西暦2027年

20年前から突如始まった急激なオゾン層破壊により、世界の97%は海になり、人間の耐性以上の紫外線が降り注ぐため、陽の光を浴びれない世界になっていた。

日本も例外はなく、陸地のほとんどが沈み、急激な人口減少とともに、激動の時代を迎えていた。

「長老！ 部屋から出ても大丈夫ですか？」

紫外線を遮る巨大な建造物は自衛隊の潜水艦ドッグであつた。

長老と呼ばれた老人はその建物の最高権力者である。

「大丈夫じゃよ。キース。真面目に働いてあるか？」

「ええ、今日も面倒くさい仕事で一杯一杯ですよ。」

そう答えた若い男は潜水艦のメカニック達をまとめた補給部隊長である。

「そうかそうか。お前には期待してあるぞ」

「しかし今日は機嫌が良さそうですね。何かあつたんですか？」

キースが怪しむように質問した。

「ああ、やつとな、光がみえたんじゃよ」

「光？」

「そうじや。この世の中を照らす光をな… キース。お前さんには期待…」

「はいはい！ 期待はわかりました！」

「ふあつふあつ！ おつ！ そうじや、わしのかわいいペンタは？」

ペンタとは長老がこの基地にきた30年前からいつも一緒に行動しているペンギン型のロボットである。

「ちゃんとメンテナンスしておきましたよ。よつ」

キースはペンタのスイッチを入れた。するとそのロボットはあたりをキヨロキヨロして状況を把握したように両手をあげ長老に叫んだ。

「ペーーーン！――！」

その日の夜、基地長室に一人の男が呼び出された。

コンコン！

「入つてよいぞい」

「失礼します」

長老の座る椅子の前に現れた男は50歳前後のヒゲを生やした男であつた。

「艦長。先日の話の事じやが」

「はい。私がその任務に当たらせていただきます。」

男は敬礼をしながら答えた。

「そうか。艦長…おまえさんには本当に酷な任務だと思つ。ただ…

「わかつております。長老。このままでは…」

「そうじや。現在、日本の戦力を握る市民防衛軍は上層部の水面下の裏切りにより、クラウスの私設軍隊じや…そして奴が狙うのは…」

「軍事テロ…」

「ああ…それだけは絶対に阻止しなければならん。」

「しかし何故20年前のセンチュリオンを？」

「君は鳴海君という青年を覚えておるかね？」

「勿論。私のかけがえのない親友でした。センチュリオンがテロの標的になり艦と共に海に…」

「そうじや。彼とその双子の妹に不思議な力があるのは知つておるか？」

「不思議な力…？」

長老がさらに続けた。

「クラウスの部下にN.O.・13と呼ばれる男がある。奴は人の精神を自由に操れる力を持つておる。」

「そんな事が……」

「ああ。N.O.・13のその力に、そしてクラウスの潜水艦軍隊に対抗できるかもしけないのが鳴海君とセンチュリオンの力なのじゃよ。」

「ではまさかセンチュリオンがテロの標的にされたのは……」

「間違いなく標的は将来邪魔になるであろう鳴海君だつたんじやろうな……」

「そんな……」

艦長の目に静かな怒りが宿る。

「お願いじや。艦長。過去へ戻り、鳴海君が、センチュリオンが破壊される前にこの時代に彼らを時空転移させてくれ」

「しかし過去に戻るなどという事が本当に……？」

長老は足元に置いてあつたペンタを抱え上げた。

「こいつとは昔から一緒の親友みたいなもんじや。こいつの体内に時空間転移装置を内蔵した。現代科学の最先端のを詰め込んだんじや。」

老人はペンタのスイッチを入れた。

「ペーーーン！！！」

「こいつを連れて行き、30年前のワシに渡してくれ。過去のワシもこのペンタを見ればおまえさんの話をきっと信じるじやろう。なんせ世界でペンタは一匹だけじやからのう」

老人は笑い声を上げながらペンタを艦長に手渡した。

「わかりました。では30年前に戻り、その10年後、センチュリオンと鳴海君をこちらの世界へと必ず連れて参ります。」

「つむ。艦長。おまえさんには長い旅をさせてしまつが、頼んだぞ。」

「

数日後、日本の沿岸に20年前に爆発音を残し行方不明になつたセントユリオンが当時のままの姿で浮上するといつニースが日本を騒がせた。

「さあ…忙しくなるぞい！キース！…！」

「え？じいさん、まさかあの連中、このドッグヘ？」

「彼らは過去からの光なんじゃよ」

キースは怪しげな目で長老を訝しみながら工事内に指示を出した。

「補給物質用意…！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451c/>

2027

2010年12月18日22時18分発行